



若者へのメッセージ 53

人類学者 山極 壽一

【第二回】人生の転換期

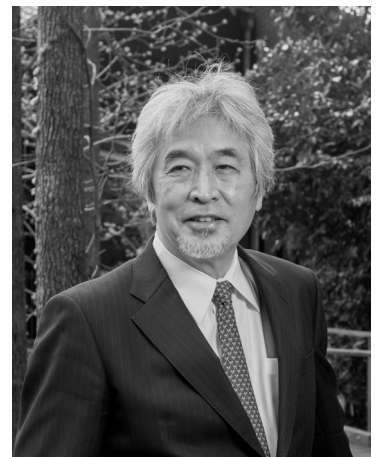
子ども時代の探検熱と高校から大学にかけての社会への疑問が結びつき、雪の上でサルを覗いていた学生との出会いが、後に私の指導教員となる先生が書いた本を思い出させ、私をサル学へと導くきっかけとなった。

「サル学」との出会い

1950年代に東京郊外の町で育った私は探検や冒険に憧れ、秘密基地を作ったり、ターザンごっこをしたりして遊んでいた。でも、中学や高校でスポーツに熱中し、当時吹き荒れた学生運動に参加したりするうちに、人生の意味がわからなくなった。ただ、科学が未来を拓くはずという時代の空気に流されて、京都大学の理学部に入学することになった。そこを選んだ理由は、東京を脱出したかったことと、自分が所属する

学科を決める必要がなく、しばらくはモラトリウム（猶予期間）でいられたからである。

また、大学紛争の最中だったので授業がなく、私は古本屋回りをしてひたすら本を読んだ。スキー部に入って、雪原を走るノルディック競技に熱中した。2回生の終わる春に、私は長野県の志賀高原の雪の上でサルを覗いている学生に出会い、「サルを知ることが、ヒトを知ること」というサル学の存在を知った。そのとき、少し前に本屋で買った『ゴリラとピグミーの森』（1961年、岩波書店）という本を思い出した。そ



山極 壽一（やまぎわ・じゅいち）

1952年、東京都生まれ。京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士後課程単位取得退学。理学博士。ルワンダ共和国カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンター研究員、京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科助教、同教授、同研究科長・理学部長を経て、2020年まで第26代京都大学総長。人類進化論専攻。屋久島で野生ニホンサル、アフリカ各地で野生ゴリラの社会生態学的研究に従事。日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長、日本学術会議会長、総合科学技術・イノベーション会議議員を歴任。

現在、総合地球環境学研究所 所長、2025年国際博覧会（大阪・関西万博）シニアアドバイザーを務める。南方熊楠賞、アカデミア賞受賞。著書に『人生で大事なことはみんなゴリラから教わった』（2020年、家の光協会）、『スマホを捨てたい子どもたち―野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』（2020年、ポプラ新書）、『京大というジャングルでゴリラ学者が考えたこと』（2021年、朝日新書）、『猿声人語』（2022年、青土社）、『共感革命―社交する人類の進化と未来』（2023年、河出新書）、『森の声、ゴリラの目―人類の本質を未来につなぐ』（2024年、小学館新書）、『争いばかりの人間たちへゴリラの国から』（2024年、毎日新聞出版）、『老いの思考法』（2025年、文藝春秋）など多数。

して、その学生は京都大学理学部の先輩であり、その本の著者はその学生が所属する自然人類学研究室の伊谷純一郎という助教であったのである。

たちまち私の頭の中でその二つが結びついた。人間の本质を知るには、古今東西の思想を探るだけでは足りない。人類の過去に遡^{さかのぼ}って進化の足跡をたどらなければ、理解を深められないのではない。しかし、有史以前の人類の行動や社会の姿は化石からはわからない。それには人類に系統的に近縁なサルや類人猿の暮らしを参考にするのが最も近道なのだ。人類に最も近縁なゴリラやチンパンジーはアフリカの熱帯雨林に棲^すんでいる。そこに行けば、子どもの頃に夢見た世界に出会えるかもしれない。私の心にもみるみる探検熱が湧き上がってきた。

伊谷さんの本は、190年にアフリカへ単身でゴリラの調査に出かけたときのエッセーである。ケニアの首都ナイロビから赤いオースチンで国境を越え、ウガンダの「入らずの森」へと分け入る。そこで出会った狩猟採集民のピグミーといっしょにゴリラを追跡する日々が記されている。独立前夜のナイロビの異様な空気、陽気で物静かなピグミーたちの暮らし、垣間見たゴリラたちの威厳に満ちた態度。読み進むうちに、自分が伊谷さんになって森を歩いているような

気がした。

さっそく、伊谷研究室を訪ねてみると、机の上で院生たちが花札に興じていた。あたりには酒瓶が転がっているし、得体のしれない動物の毛皮などがあって、まるでうわさに聞く梁山泊^{りやうざん}のようだった。

公苑に泊まり込んでサルを観察する

私はここで卒業研究をすることにした。まずはスキー部で通った志賀高原のふもとにある地獄谷野猿公苑で、餌付けされたニホンサルの調査を始めた。100頭を超えるサルにはすべて名前が付いていたが、2週間ぐらいうるとサルの顔が夢に出てくるようになって、後ろ姿でもサルを識別できるようになった。秋から冬にかけての交尾期に、私は雪の上でサルを追跡し、オスやメスが交尾相手をめぐってどんな攻防を繰り広げるかを調査し、卒論としてまとめた。

京都大学は自由の学風が伝統で、学部の壁を越えてどこでも出入りできた。近衛ロンドという社会学、人類学、民族学、精神分析学、霊長理学などの学者が一堂に会する研究会も開かれていて、自由な発想をするとはこういうことかと私は耳を澄ました。

大学院の入試に2回目を通り、私は自然人類学研究室で学ぶことになった。サルの社会に興

味があった私は、日本列島各地を回ってサル社会の変異を調べてみたいと思った。伊谷さんの卒業研究は高崎山自然動物園（大分県）のニホンサルの社会であり、その成果は『高崎山のサル』という本に克明に記されている。ただ、日本列島は北から南まで多様な植生帯がある。私は志賀高原の雪の上に暮らすサルたちが、雪の降らない高崎山とは違う社会をもつという予感があった。しかし、伊谷さんは自身の高崎山での調査経験から、一つの地域のサルの社会を調べるにも何カ月もかかるのに、複数の地域のサル社会を比べるなんて何年もかかると言って反対した。

それでもあきらめきれない私は、サルの外形特徴を比較することを主眼にして地域比較の研究を認めてもらい、下北半島から屋久島までニホンサルの分布域を9カ所にわたって訪ね歩いた。その結果、美しい照葉樹林に生息する屋久島のサルに心を奪われ、ここに9カ月間滞在して野生の暮らしを調査することにした。それは本土のサルとは違い、小集団で隣り合い、頻繁に分裂する社会だった。

私はここで人間以外の霊長類の社会を研究する面白さを知った。野生のサルの調査は茨の道だったが、未知の世界の魅力に満ちあふれていた。